福建省福清訪問（2018年－2019年）

2018年5月22日（火）

福建省福清東瀚村を訪れ、陳善慶さんの遺族陳興傳さん、薛能貴さんの次男・薛由臣さん、洋坪村の陳盛美さん、林友慶さん、林振栄さんの３男の息子の林求香さんからお話を聞き、薛能貴さんと林振栄さんの墓参りをした。

仁木ふみ子編《史料集　関東大震災下の中国人虐殺事件》には、福清出身者は13名が載っている。

名簿の13名とは、以下である。

1、陳盛美，生年不詳，本籍福建福清六十都楊坪村，職業購貨商，被害前住居、被害時間・地点不詳。

2、林友慶，生年不詳，本籍福建福清六十都東県村，職業購貨商，被害前住居、被害時間・地点不詳。

3、陳存礼，30歳（1893年出生），本籍福建福清六十都下里山后村，職業購貨商，被害前住所神奈川鶴見潮田町一六四九，被害時間9月3日，被害地点は潮田町から東京に向かう途中。

4、林振栄，40歳（1883年出生），本籍福建福清，職業商人，住所京橋新港町四の一。被害時間9月2日午前，被害地点は月島新佃島交番所前，加害者日本人，被害状況は鉄棒で乱打され半死半生。

5、上記林振栄とともに被害にあった妻曾松，29歳（1894年出生），及び彼らの娘雪子，9歳（1914年出生）。

6、魏進本，生年不詳，本籍福建福清，職業商人，住所京橋新港町四の一。被害時間9月2日午前，被害地点は月島新佃島交番所前，被害状況は鉄棒で乱打され半死半生。

7、陳隆順，22歳（1901年出生），本籍福建福清，職業商人，住所本所村町三の三九，被害時間不詳，被害地点は青島町，青年団と警察に殴打された。

8、陳善慶，38歳（1885年出生），本籍福建福清，職業商人，住所神奈川鶴見潮田町一六四八，被害時間は9月3日、被害地点は潮田町から東京に向かう途中。青年団に殴打された。

9、薛能貴，19歳（1904年出生），本籍福建福清六十都楊坪村，職業商人，住所と被害時間不詳，被害地点は上野美術学校のそば，在郷軍人に殴られ負傷した。

10、林達宝，24歳（1899年出生），本籍福建福清，職業商人，住所と被害時間不詳，

被害地点は上野美術学校そば，在郷軍人殴られ負傷した。

11、林昌雲，生年不詳，本籍福建福清，職業商人，住所と被害時間不詳，被害地点は上野美術学校そば，在郷軍人に殴られ負傷した。

12、林宝泉，21 歳（1901 年出生），本籍福建福清，職業商人，住所北千住町二の一二，被害时间 9 月 3 日，被害地点は月島大橋付近，日本人に殴られ負傷した。

この名簿をもとに、地元『福清僑郷報』の記者陳仁傑さんは、地元に調査に入り、福清黄檗文化促進会や地元の華僑聯誼会などの協力のもと、関係者の族譜や関連資料を調べ、「大海から針一本を見つけるような」作業を通して、このうちの 6 名の遺族を捜し当てた。

その 6 名の遺族による証言は以下である。

（1） 陳盛美さんの遺族は東瀚村文山村洋坪村（楊坪は洋坪と変わった）の陳基福、陳基梅、陳基旺、陳基雲、陳基華である。洋坪村は東瀚村の南部に位置し、全村で 120 戸、500 人余りの村である。陳基福さんは「陳盛美は私の叔父さんです」と言った。彼は『洋坪氏族譜』を開いて示した。族譜のなかの「信美」が盛美です。地元の発音では音が同じです。族譜に書かれている「卒民国葵亥十二年」は 1923 年のことで、農歴 8 月とは太陽暦の 9 月です。この村にはたくさんの陳氏の一族がいます。（写真は、族譜を持って説明する陳基福さん）

（2）林友慶さんのことは林同安さんが証言した。

林同安さんは語った。林友慶は私の祖父の末の弟です。私の曾祖父の名は林孝棟で 5 人の子どもがあり、上から、友長、友発、友康、友焱で第五番目が友慶です。友康が私の祖父で、友慶は叔父にあたります。間違いありません。

東瀚僑聯の林友雄さんは次のように紹介した。「福清六十都」というのは「東瀚鎮」のことで、 ○○都と

いうのは福清から福鼎沿海一帯の古い呼称で福清西部を一都とし、東瀚に隣接する沙埔鎮が六十一都になる。現在東瀚村には 2300 戸があり人口は 7200 名であると。

また、そもそも、林友慶のことは、陳記者が一昨年 10 月に書いた記事を見た退職教師の陳基福さんから情報提供があった。それによると、彼の母親から聞いたところでは、林友慶は林孝楼が労工として日本に連れて行ったという。台湾にいる彼の息子林友茂と陳記者は連絡をとって、林友慶が遠い親戚にあたるという話しを聞いて、なお確信をもった。

（３）「薛能貴は私の父親です。」

東瀚鎮大壌村薛厝自然村の薛由臣さん、薛由宝さんが族譜をもってきて証言した。大地震の前に撮ったという写真も大事に飾ってある。

薛由臣さんは今年 78 歳の退職教師であり、薛由宝さんは彼の弟で 65 歳になる。

長男の由忠は 2013 年に病没した。由孝は幼くして亡くなった。由臣さんは回想して次のように語った。父親能貴は一生涯薬缶を手放しませんでした。傷が残り、身体は弱くて病気がちで、ほとんど労働能力はありませんでした。父親は一生涯「日本」という二文字を忌み嫌い、誰かが口にすると、父親は、全身が震え筋肉が痙攣を起こすほどアレルギーになっていました。父親は一度だけ彼に話しをした。「自分が傷を負ったのは 19 歳の時で、東京のよくわからないところで暴徒に鉄棒で滅多打ちにされたからだ。死地を逃れて故郷の人の助けで中国に逃げ帰った。やっとのことで一命をとりとめた」「子供たちには日本へは行くな！と言っていた」と。

この話は別の村民薛来平さんも証明した。彼が若いとき、老人会で薛能貴が老人達に鉄棒で滅多打ちにされ一命を取り留めた話をし、これは奇跡だった。血腥い大虐殺のなかでほとんど被害に遭わずに生き延びた人はいないと語っていた。薛能

貴さんの兄弟は 2015 年 10 月の『福清僑郷報』の記事を見て、父親の被害に驚き憤慨し、「真相は明らかだ！私たちは日本政府を訴え、父親に公道をとりもどし、天上の霊を慰めようではないか」と語った。

墓は母親とともに岩の多い小高い丘にあり、祀られていた。

（4）「陳善慶は私たちの伯（叔）父」

東瀚村の北部に位置する東庄は東瀚村の中心地から約 5 里。陳姓は 320 戸あり 1200 名の村である。

陳興傳さんと陳興斧さんが証言した。

陳永徳には 5 人の子があり、上から昌挙、昌良、昌軒、昌遠、昌林である。次男の昌良が善慶の祖父にあたる。陳興斧の伯父、陳興建の叔父である。

陳興傳（1938 年生）さんが証言した。彼の伯父でもあり、伯母は日本人である。伯父がいつ日本に行ったかは分からないが、1923 年に伯母と息子、娘を連れて戻ってきた。伯母の本当の名前はだれも知らないが、村では「ネエサン」、伯父は「ポボウ」と呼んだ。伯父は日本から連れてきた男の子を陳興仁と呼び、日本語で「ヒデボウ」と呼んだ。男の子は 4 歳だった。娘は「アラチャン」といい、兄より 2 歳ほど下だった。陳興傳さんの話を今年 86 になる陳厚滔さんが証明した。

2 人の話によれば、陳善慶は一生悲惨の局地だった。陳善慶が戻ってきたとき、身体には後遺症が残り、手は極度に弯曲し、両手は後を向いており、両脚はすぐにつまずいて倒れ、とても働ける状態ではなかった。故郷に戻ったあと、陳善慶は「縁談のとりもち」の仕事をしていたが、生活は極度に困難で赤貧洗うが如しで、いつも食べるものもなく、知り合いの助けや野生の山菜で飢えを凌いでいた。1943 年 2 月、食べるものもないので、陳善慶は田畑を父の兄弟に売った。

陳興傳さんは涙ながらに話した。当時陳家はとても貧しく、1943 年に陳善慶は 24 歳の息子を地主の息子の身代わりに「国民党の兵隊」として出し、その後音信不通である。一人娘は早くに嫁に出し、行方は知れない。陳厚滔さんによれば、1947 年、彼が 17 歳の時、陳善慶は金銭的な問題で居づらくなり、翌年福州で借りた家のなかで首を吊って死んだ。陳善慶の妻は陳善慶が逃げ出した翌年餓死した。「彼女はいつも私を連れて山菜採りに行った。私は彼女を永遠に忘れない。色黒で小柄で、善良な人だった。何年もか

かって当地の方言を身につけた。彼女の葬儀は私と関係者で行った。墓は村の前にある。

陳善慶の訪日について陳興建さんは語った。「私はかつて父親の陳善風から聞いたことがある。彼は日本で布の行商をしていた。1923 年の中秋節近く、東京のどこか分からないところで一群の暴徒に鉄棒で滅多打ちにされ、四肢は折られ、気息奄々となったところを、これを聞きつけた夫人によって命をかけて救い出された。夫人は日本人だったので苦労に苦労を重ねて中国に戻った。」

2018 年 5 月、私たちは、「ネエサン」と呼ばれていた、陳善慶さんの妻の墓を訪ねた。それは今は落花生畑になっていた。1950 年代に墓石を取り除いたという。畑の周りにある石をかきあつめ落花生の畝に積み重ねて仮の墓標とした。黙祷し、花を供え、線香を手向けた。林伯耀さんは「(日本人の) お姉さん、困難ななか (中国人の夫を) 祖国へ連れ帰ってくれてありがとう・・・」と涙声で語りかける。町田さんは「95 年を経て日本人が初めて訪ねてきました。遅くなりました。日中の和解の象徴であるお姉さん、だんなさんといっしょに、私たちといつまでも平和な世界で生きていきましょう」と哀悼の言葉を捧げた。

翌 2019 年 5 月に訪ねたときには、親族がその土地の権利を買って、落花生畑を切り開き「ネエサン」の墓が表に作られていた (写真下)。浅草の運行寺 (棗寺) と追悼する会の銘を刻んだ観音像を供え、山崎明圓師が妙法蓮華経を捧げ、みんなで追悼した。

この年、新たに遺族から次のようなお話を聞いた。陳興建さんは「陳善慶家族は農暦1923年末に帰国した。新暦でいうと1924年の歳初めにあたる」と証言した。

“ネエサン” が亡くなったときお墓まで一緒に付き添った陳興金さんが、「村の年

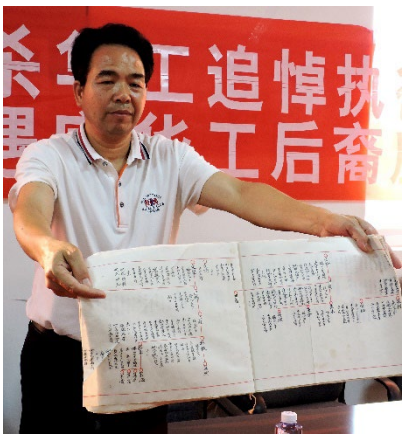
上の人が語るには、陳善慶は『中国に帰った方が良い、日本にいたら殺される』と“ネエサン”＝妻の兄弟から勧められたと話していた。また『この奥さんが居なければ、死んでいた』とも」と語る。

陳善慶さんが襲われたときの様子、故郷へ戻ったときの様子を、陳興傳さんが話した。①誰何する日本人に陳善慶が『中国人だ』と答えると、『お前は中国でも必要とされない奴だから日本に来たんだろう』と侮辱された。②子供たちのヒデ坊とアラちゃんは自分よりも18歳と15歳ほど年上だ。③陳善慶は寡黙で夫婦の間にも会話はなかった。④一家は、貧しい村の中でも一番貧しかったが、その理由を陳善慶は日本でお金と商売道具と財産一切を奪われたからだと話していた。“ネエサン”も日本人に襲われたからだと言っていた。⑤生地を背負って街を歩いている時にやられた。背負っていたリュック・カバンのなかみを取り上げられ、後ろ手に縛りあげられた。指の太さほどの鉄棒で殴られた。⑥多くの人が同時にやられた。コレアの人もやられた。中国人、台湾人もやられた。“ネエサン”は偉かった、自分の夫だけでなくやられた人たちを助けた。陳善慶がそう話していたし、“ネエサン”も同じことを話していた。

さらに陳興傳さんは続けた。「陳善慶の被害現場に同郷の中国人がいたかどうかは聞いていないのでわからない。鉄棒以外の武器で聞いているのは鳶口（指でカギ形を作って見せた）。鉄棒は肩、鳶口は腹、鎖で足を襲った。陳善慶がどこで捕まり、どこへ連れていかれたのかは聞いていないので知らない。“ネエサン”が夫と子供たちを連れ帰った時の様子などは聞いていない。日本の親・兄弟のことも知らない」。

村人はみんな「ネエサン」と呼んでいたが、この「ネエサン」の本名は未だにわからない。林伯耀さんは、この「ネエサン」の身内の人を捜し出し、遺骨を彼女の実家に送り返してあげたいと訴えている。

（５）「林振栄は私の祖父，雪子は私の伯母さん」



林振栄の４人の息子は箕脳、箕華、箕富、箕貴である。

林求香さん（左写真）は彼の伯母は林振栄の娘の林雪宋（日本名雪子）で、1914 年生まれだと語った。

今年 50 歳になる林求風さんは次のように述べた。

「林振栄は私の祖父です。私は林振栄の次男である箕華の子です。私は父の世代の人達から、祖父が当時日本で当地の女性と結婚し、４人の娘と２人の息子を得た。私の父は日本で生まれた。当時祖父は帰化して

おり、「吉田」姓を名乗った。家譜には私の伯父箕脳は祖父の養子であると書いてある。父の同輩によれば、箕脳の両親は関東大震災で死に、箕脳はわずか2歳で孤児となったので、祖父が自分の命さえ危険ななかで彼を養子にした。私の叔父箕富は 1932 年に生まれ、二、三歳のときに帰国した。箕脳は1936年に死んだ。祖父は1935年に子どもを連れて帰国した。故郷に帰った後、東瀚村に定住した。祖父は帰国した後、妻を娶り、一子をもうけた。それがわたしの叔父の箕貴である。

林求風さんは続けた。1989年、私は日本に自費留学したが、出かけるとき、伯母の林雪宋（彼女の日本名は吉田雪子）から日本に行ったときに東京都深川区区役所で彼女と祖父の戸籍謄本を探すように言いつけられた。1990年、私は伯母に教えられた住所をもとに調べ、深川区がいまは江東区になっていることがわかったので江東区役所に行ったが、区役所から当時の戸籍関係書類はすべて関東大震災の大火で燃えてしまったと言われた。

箕富の息子の林求香さんによると、1980年代に日本の記者が彼の家を何度も訪れ「残留孤児」ではないかといい、伯母と日本語で会話した。私の父親世代は箕貴以外は、数十年前に帰国したが、みな日本語を覚えており、日本人記者は彼らの腕に種痘の跡があるのは日本生まれで日本から中国に帰った証拠だといった。1990年、記者は伯母が日本に定住する手続き申請の援助をし、2006年にようやく日本国政府の許可を得た。雪子一家数十人は日本に帰って住んでいる。